



| | |
|--------------|---|
| Title | タイ語の触覚を表す表現における共感覚的比喻 |
| Author(s) | 宮本, マラシー |
| Citation | 言語文化研究. 2016, 42, p. 147-162 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/56207 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タイ語の触覚を表す表現における共感覚的比喩

宮 本 マラシー

Synaesthetic Metaphors Relating to Tactile Sensation in the Thai Language

MIYAMOTO Marasri

Summary: This article aims to examine the characteristics of metaphoric transfers of word relating to tactile sensations in the Thai language by semantically analyzing both idiomatic expressions, which have been transferred from words describing other sensations to describe the tactile sense, and touch words that have developed to describe other senses. The results show that two-way transfers have been found in <touch ⇔ sight> and <touch ⇔ auditory>, but one-way transfers have been seen in <touch → taste> and <touch → smell>. Moreover, words describing visual sensations, the sense of taste, olfactory sensations and auditory sensations that have been transferred from touch words connote physical sensations and / or internal sensations. But on the contrary, there is no evidence that words describing tactile sensations which have been transferred from visual words and auditory words connote physical sensations.

Keywords: touch words, synaesthetic metaphors, metaphoric transfers in the Thai language

キーワード：触覚語，共感覚的比喩，タイ語の比喩的転用

1. はじめに

1.1 背景

視覚，味覚，嗅覚，聴覚，そして触覚といった五感を表す表現の研究には，Williams[1976]，山梨[1988]，国広[1989]等の研究のように感覚形容詞を取り扱うものもあれば，Sweetser,E.[1990]とEvans and Wilkins[2000]の研究のように感覚動詞を取り扱うものもある。前者は5つの感覚分野の形容詞を研究の対象にし，ある感覚を表すのに別の感覚分野に属する語を比喩的に用いる「共感覚的比喩 (Synaesthetic metaphors)」の観点からの研究である。後者は，「見る」や「聞く」のような感覚動詞を研究の対象にし，視覚は知性，聴覚は従順，などのように感覚動詞が人間の内面的な感覚を表すように転用されると主張する研究である。

五感を表す表現の研究では，感覚動詞よりも感覚形容詞を扱ったものが主流であり，主に比

喩的転用の方向性に焦点が当てられているのに対し、転用された感覚語が持つようになる意味合い（転義）についてはあまり注目されていない。共感覚的比喩の観点で言えば、タイ語の感覚形容詞の比喩的転用の研究においてもその方向性について論じている研究は見られるが、転義に注目し考察したものは未だ見当たらないのが現状である。

1.2 目的

本稿は、「共感覚的比喩 (Synaesthetic metaphors)」の観点から、タイ語における触覚を表す表現を分析し、そこに見られる転用の特徴を考察することを目的とする。そのため、触覚を表すために他の感覚の形容詞から転用されている表現、またその逆で、触覚形容詞が他の感覚を表すように転用されている表現を分析し、次の2点を明らかにする。

第一に、五感の感覚表現の分野内で、触覚を表すようになった他の感覚形容詞からの転用、また逆に他の感覚を表すようになった触覚形容詞からの転用、といった触覚表現における共感覚的比喩 (Synaesthetic metaphors) の転用の方向性。

第二に、第一で言及した共感覚的比喩において派生する意味的な特徴。

1.3 触覚の定義

中村[1995]は『感覚表現辞典』において、「同じ皮膚感覚といっても、いくつかの質的な違いが見られるので、「触感」「痛痒」「湿度」「温度」の四つの分野を区別することにした」[中村1995:11]。『精選版 日本国語大辞典』には、「圧覚」について次の通りの説明がある。「身体の諸器官の表面が圧迫を受けたときに起こる感覚。全身の皮膚や粘膜の表面に散在する圧点で感じられる。皮膚を強く圧迫したときに深部に起こるものをさし、皮膚や粘膜の表層に起こるものは触覚といって区別することもある」[小学館2006]。また、『広辞苑 第六版』においての「圧覚」の定義は次の通りである。「触覚の一種。圧迫や衝撃が強いため、普通の触覚より皮膚の深部にある受容器によって受容される感覚」[岩波2008,2012]。本稿では、上記の3者を参考にし、中村[1995]の指摘にある「触感」「痛痒」「湿度」「温度」に、「圧覚」を加え、「触覚」として扱う。ただし、それらの感覚を表す言葉は数多く存在するため、すべての言葉を研究の対象にすることは非常に難しいと考え、本稿においては研究対象の形容詞はインフォーマント¹⁾の意見を参考にしながら、筆者が最も基本語だと判断するもののみとする。その中には、たとえば「khrù?khrà? でこぼこ」、「nə?nà? べたべたする」のような擬態語だと思われるもの、や「lěm 尖がっている」、「thûu (先が尖がっている物が) 丸くなっている」のような視覚語と

¹⁾ タイのインフォーマントは、平成26年度科学研究費助成事業、基盤研究(C)、課題番号：23520670の助成を受けて、平成27年2月27日～3月9日に、タイで触覚の言語表現の調査を行った際のインタビューの対象者10名(内訳：20代の男性1名、30代の男性1名、50代の男性1名、20代の女性2名、30代の女性1名、40代の女性2名、50代の女性2名)のタイの共通語を用いている人たちである。

も考えられる語は、研究の対象外とする。

1.4 先行研究

Williams J.M.[1976]の「共感覚的比喩 (Synaesthetic metaphors)」についての論述には、触覚語は直接視覚、聴覚そして味覚を表すように転用されることがあり、また一旦味覚に転用された後、嗅覚に再転用されることは見られるが、触覚語が直接嗅覚に転用されることもなければ、その逆方向で、視覚語、味覚語、嗅覚語、そして聴覚語が触覚を表すように転用されることもないという記述がある [Williams 1976:463]。Williams[1976]の指摘した比喩的転用の方向性は、その後多くの研究者によって再検討が行われている。その中に、山梨[1988]、国広[1989]、山口[2003]、瀬戸[2003]、楠見[2005]などがある。山梨[1988]と国広[1989]は、日本語においては触覚語から直接嗅覚を表すように転用されることもある、と Williams[1976]の論述とは違った指摘をしている。

タイ語の場合は、触覚に言及する研究は佐藤[2000]、武藤[2009]、そして宮本[2015]の研究に見られる。佐藤[2000]は感覚形容詞全体の意味的拡張の考察の一環として触覚形容詞の意味的拡張も取り上げている。共感覚的比喩に関しては、触覚語から他の感覚を表すようには拡張するが、逆の方向はないという Williams[1976]の指摘を基本的に支持しているが、触覚語から直接嗅覚を表すように転用されることがあると述べている。武藤[2009]はタイ語を含めた9つの言語の共感覚的比喩における比喩的転用の方向性を考察するために、共感覚的表現を挙げ、各言語に5名の被験者に当該言語において表現が可能であるかどうかを回答してもらった。タイ語の回答には、触覚を表すのに視覚語を用いることが可能な例が見られる、とあるが、具体的なタイ語の表現は提示されていない。また、宮本[2015]は嗅覚と聴覚を表す表現における比喩的転用を論述した際、触覚を表すように転用されるのは、聴覚語からの転用は見られるが、嗅覚語からの転用は見られないことを論証した。3者の研究はいずれも比喩的転用における方向性だけに視点が置かれている。

2. 触覚を表す表現と触覚語

2.1 触覚形容詞

触覚を表すタイ語の形容詞を[表1]に示す。

[表 1]

| 触覚の分野 | 感覚形容詞 | 意味 |
|-------|------------------|-------------------|
| 触感 | khěŋ | かたい |
| | kradâaŋ | かたい |
| | n̄iao | かたい, 弾力のある |
| | n̄im | やわらかい |
| | n̄um | やわらかい |
| | l̄ěeo | やわらかい |
| | ʔòon | やわらかい |
| | yàap | 粗い |
| | laʔiat | 細かい |
| | sàak | ざらざらした |
| | nian | きめ細かい |
| | fùut | 摩擦(引っかけり)のある |
| | l̄uun | すべすべ, ツルツル |
| | riap | 平らな ²⁾ |
| | khom | 鋭い ²⁾ |
| th̄uu | 鈍い ²⁾ | |
| 痛痒感 | cèp | 痛い |
| | khan | 痒い |
| | sɛɛp | 沁みる |
| 乾湿感 | h̄êŋ | 乾いた |
| | ch̄uun | 湿った |
| | piak | 濡れた |
| | n̄iao | 粘っこい |
| 温感 | r̄oon | 暑い, 熱い |
| | ʔùn | 暖かい |
| | n̄ăao | 寒い |
| | yen | 涼しい, 冷たい |
| 圧感 | rɛɛŋ | 強い |
| | bao | 弱い, 軽い |
| | nàk | 重い |

「n̄iao」は「かたい」と「粘っこい」, 「r̄oon」は「暑い」と「熱い」, そして「yen」は「涼しい」と「冷たい」, 「bao」は「弱い」と「軽い」という意味で用いられているように, 一つの形容詞が複数の感覚を表す場合もあれば, 「かたい」と「やわらかい」のように, それぞれの感覚を表す複数の形容詞がある場合もある。「かたい」には「khěŋ」, 「kradâaŋ」, 「n̄iao」があり, そして「やわらかい」には「n̄um」, 「n̄im」, 「l̄ěeo」, 「ʔòon」という形容詞がある。インフォーマントによると, 「kradâaŋ かたい」は, 単に「khěŋ かたい」のとは違い, 例(1)のように, そうあって欲しいやわらかさ, 滑らかさ, または優しさが欠けているさまである。一方, 「n̄iao かたい」は強化ガラスのように外の力が加わっても簡単に壊れたり, 切れたりしないさまである。かたいステーキのように噛みきれない食材のかたさを表す場合にもよく用いられる。

²⁾ 「平らな」, 「鋭い」, 「鈍い」という日本語は視覚語としても触覚語としても使われることがあるが, タイ人の感覚では, タイ語の「riap 平らな」, 「khom 鋭い」, 「th̄uu 鈍い」は触覚語である。「riap 平らな」は, 凸凹のない道路を走行した感じやすべすべの肌に触れた時などの触感を表す言葉である。また, 包丁などは, 物を切って初めて切れ味が「khom 鋭い」のか, 「th̄uu 鈍い」のか分かるようになる。そのため, ここでは, 「riap 平らな」, 「khom 鋭い」, 「th̄uu 鈍い」は接触することによって分かる感覚だと考え, 触覚語として扱っている。

- (1) panhǎa phǒm hēŋ yàap krađǎaŋ lē? fuu pen siŋ thiŋ kuan cai sǎao-sǎao yàaŋyǐŋ³⁾.

乾燥して、粗くて、硬くて、そして膨らんでいる髪の問題は女性を最も悩ませることである。

「やわらかさ」を表す場合は、タオル地のパジャマや丁度よい具合に炊けたご飯のように手触り、肌触りがふんわりしている、弾力性に富んでいる、また触ったり、撫でたり、噛んだりすると快適なやわらかさを感じさせるようであれば「nŭm やわらかい」を用い、シフォン生地や水分を多めに炊いたやわらかいご飯のように、やわらかくは感じるが弾力性やふんわりとは感じられないものであれば、「nĭm やわらかい」を用いる。お粥や液体石鹸のように、水分が多く含まれていて、液状である場合は「lĕeo やわらかい」で表される。そして、板や骨のように一般的にある程度のかたさが基準とされているもの、またはある程度のかたさが求められるものがそのかたさに及ばない場合は「ʔǒn やわらかい」が用いられる。また、「ʔǒn やわらかい」はまだ成熟していない人、十分に育っていない動植物の状態を表す形容詞としても用いられる。

2.2 触覚を表す触覚形容詞以外の感覚形容詞

触覚を表すのには、[表1]の基本語以外にも、[表2]のような表現も見られる。

[表2]

| 触覚を表す表現 | 各語の意味 | 用いられる意味 |
|-------------------------|----------------------|------------|
| cĕp-luk-luk | 痛い・深い（・深い） | （精神的に）深く痛い |
| sǎmphàt-baaŋ-bao | 触る・薄い・軽い | 軽やか、軽快なさま |
| lŭup-phĕeo-bao/phĕeo | 撫でる・音が小さい・軽い / 音が小さい | 軽く優しく撫でる |
| sǎmphàt-phĕeo-bao/phĕeo | 触る・音が小さい・軽い / 音が小さい | 軽く優しく触る |

[表2]で提示しているように、「lŭk 深い」は「cĕp 痛い」と共起し、痛みのきつさを表し、内面的な痛みを表すようになる。「baaŋ 薄い」は「bao 軽い」と共起し、「sǎmphàt 触る」を修飾すると快いまでに軽々としていることを表す。また、「phĕeo-bao 音が小さい・軽い」または「phĕeo-phĕeo 音が小さい・音が小さい」は「sǎmphàt 触る」と「lŭup 撫でる」を修飾すると、物理的な意味合いだけを持っている「sǎmphàt-bao(-bao) 触る・軽い（・軽い）」または「lŭup-bao(-bao) 撫でる・軽い（・軽い）」とは異なり、「やさしく～する」というように、軽さに精神的な配慮が感じられる意味合いを持つようになる。

³⁾ <http://www.taweechaiclinic.com/index.php?lay=show&ac=article&Id=539337997&Ntype=7>

2.3 他の感覚を表す触覚形容詞

2.3.1 触覚形容詞 → 視覚

触覚形容詞が明りや色を表す言葉と共起し用いられる表現を[表3]にまとめる。

[表3]

| 共起語 | 各語の意味 | 用いられる意味 |
|------------------|------------------------|---|
| sěeŋ-khěŋ | 光/明り・かたい | きつい光または明り, 暗いと明るい部分のコントラストがはっきりしすぎてきついという印象を与える写真における明り |
| sěeŋ-nùm | 光/明り・やわらかい | 快い感覚を与える光または明り |
| sěeŋ-ʔǝǝn(-ʔǝǝn) | 光/明り・やわらかい (・やわらかい) | (朝の光のように) 優しい光または明り (主に自然現象) |
| sǐi-ʔǝǝn | 色・やわらかい | 薄い色 |
| sǐi-ríap | 色・平らな | 地味な色 |
| phâap-khom-chát | 映像・鋭い・はっきりする | 鮮明な映像 |
| sǐi-khom-chát | 色・鋭い・はっきりする | 鮮明な色 |
| sǐi-cèp(-cèp) | 色・痛い(・痛い) | 派手な色 |
| sǐi-sěep(-sěep) | 色・沁みる(・沁みる) | 派手な色 |
| sěeŋ-sěep-taa | 光/明り・沁みる・目 | 眩しい |
| sǐi-ʔùn | 色・暖かい | 暖色 |
| sǐi-yen | 色・涼しい/冷たい | 寒色 |
| sěeŋ-reeŋ | 光/明り・強い | きつい光または明り |
| sǐi-nàk | 色・重い | 濃い色 |
| sěeŋ-bao(-bao) | 光・明り・軽い(・軽い) | 穏やかな感覚を与える柔らかい光または明り |
| sǐi-bao(-bao) | 色・軽い(・軽い) | 薄い色 |
| chomphuu-ʔǝǝn | ピンク・やわらかい | 薄いピンクの |
| fáa-ʔǝǝn | 空色の・やわらかい | 薄い空色の |
| khíao-ʔǝǝn | 緑の・やわらかい | 薄い緑の |
| lúaq-ʔǝǝn | 黄色の・やわらかい | 薄い黄色の |
| múaq-ʔǝǝn | 紫の・やわらかい | 薄い紫の |
| námtaan-ʔǝǝn | 茶色の・やわらかい | 薄い茶色の |
| sóm-ʔǝǝn | オレンジ色の・やわらかい | 薄いオレンジ色の |
| thao-ʔǝǝn | 灰色の・やわらかい | 薄いグレーの |

[表3]の示す通り, 視覚を表すように転用される触覚語の中では, 「ʔǝǝn やわらかい」がもっとも多く用いられ, また他の形容詞と違い, 「ʔǝǝn やわらかい」は光/明りと色彩の総称である「sěeŋ 光/明り」と「sǐi 色」以外にも, 具体的な色彩語の修飾語としても用いられる。触覚語は視覚を表すように転用されると[表4]に示すような意味合いを持つようになる。

[表 4]

| 触覚語の原義 | | 視覚への転義 |
|---------------|---|-----------------|
| khěŋ かたい | → | きつい, 快い感覚がない |
| núm やわらかい | → | 優しい, 快い感覚が与えられる |
| ʔǝn やわらかい | → | 薄い, 優しい, 穏やか |
| riap 平らな | → | 地味な |
| khom 鋭い | → | 鮮明な |
| cèp 痛い | → | 派手な |
| sèep 沁みる | → | 派手な, きつい |
| ʔùn 温かい | → | 暖かく感じる (色) |
| yen 涼しい / 冷たい | → | 冷ややかな感じがする (色) |
| reɛŋ 強い | → | きつい |
| nàk 重い | → | 濃い |
| bao 軽い | → | 薄い, 優しい, 穏やか |

2.3.2 触覚形容詞 → 味

触覚形容詞が味覚を表す言葉と共起して用いられる表現は [表 5] の通りである。

[表 5]

| 共起語 | 各語の意味 | 用いられる意味 |
|-----------------------|--------------|--------------------------------|
| rót-kradāŋ | 味・かたい | なめらかさが欠けている味 |
| rót-ním | 味・やわらかい | きつくない味, 優しい味 (主にアルコール飲料を対象とする) |
| rót-núm | 味・やわらかい | まろやかさ, 穏やかさのある味 |
| rót-ʔǝn | 味・やわらかい | 薄い味 |
| rót-thâu-thâu | 味・鈍い・鈍い | (調理の腕が未熟なため) 物足りなさを感じる味 |
| rót-sèep-khɔ | 甘い・沁みる・喉 | (喉に沁みるほど) 甘すぎる |
| wān-sèep-sái | 甘い・沁みる・腸 | (腸に沁みるほど) 甘すぎる |
| rót-nàk | 味・重い | 胃がもたれるほど濃い味 |
| rót-bao | 味・軽い | 胃がもたれない味 |
| ʔǝn.... (食材または調味料) | やわらかい | (食材または調味料) の味が足りない |
| ʔǝn-wān | やわらかい・甘い | 甘味が足りていない |
| ʔǝn-man ⁴⁾ | やわらかい・マン風味 | マン風味が足りていない |
| ʔǝn-príao | やわらかい・酸っぱい | 酸味が足りていない |
| ʔǝn-khem | やわらかい・塩からい | 塩からさが足りていない |
| ʔǝn-phèt | やわらかい・唐辛子で辛い | 唐辛子の辛味が足りていない |
| nàk.... (食材または調味料) | 重い | (食材または調味料) の味が濃い |
| nàk-wān | 重い・甘い | 甘味が強い |
| nàk-man | 重い・マン風味 | マン風味が強い |
| nàk-príao | 重い・酸っぱい | 酸味が強い |
| nàk-khem | 重い・塩からい | 塩辛さが強い |
| nàk-phèt | 重い・唐辛子で辛い | 唐辛子の辛味が強い |

[表 5] に示されている共起語にある触覚語の中で、「ʔǝn やわらかい」と「nàk 重い」は「rót

⁴⁾ 「man マン風味」はイモ, 豆, ゴマ, クリームなどの風味を表し, 食べ始めたら止められないような快適な (あとを引く) 味を表す [宮本 2012:56]。

味」の修飾語としてだけでなく、味覚語に先行し「ある特定の味が基準より強いまたは弱い」の意味合いを持つようになる。それぞれの触覚語が味を表すように転用されると、生み出される味の特徴は[表6]のようになる。

[表6]

| 触覚語の原義 | 味覚への転義 |
|-------------|----------------------------|
| kradāaŋ かたい | → まろやかさが欠けている |
| nīm やわらかい | → やさしくて、なめらかさが感じられる |
| nùm やわらかい | → まろやかさが感じられる |
| ʔɔɔn やわらかい | → 薄い、ある特定の味が足りていない |
| thūu 鋭い | → 不調和で物足りない感覚を与える |
| sɛɛp 沁みる | → きつい |
| nàk 重い | → 胃がもたれるような濃厚な、ある特定の味が強すぎる |
| bao 軽い | → 薄い、胃に優しい |

2.3.3 触覚形容詞 → におい

触覚形容詞が嗅覚を表す言葉と共に用いられる表現は[表7]の通りである。

[表7]

| 共起語 | 各語の意味 | 用いられる意味 |
|------------------|-------------------|--------------------|
| klīn-ʔɔɔn(-ʔɔɔn) | におい・やわらかい(・やわらかい) | ほのかなにおい |
| klīn-sɛɛp-camùuk | におい・沁みる・鼻 | 鼻にツンとくるような刺激のあるにおい |
| klīn-yen(-yen) | におい・涼しい(・涼しい) | 気持ちいい薫り |
| klīn-rɛɛŋ | におい・強い | きついにおい |
| klīn-bao-bao | におい・軽い(・軽い) | 軽やかな香り |
| hɔɔm-yen | 芳しい・涼しい | 芳しい薫り |

[表7]にあるように、においを表すように転用される触覚語の中で、「yen 涼しい」は他の触覚語とは違い、「klīn 匂い」以外に「hɔɔm 芳しい」も修飾する。転用されたそれぞれの触覚語が持つ転義を[表8]にまとめる。

[表8]

| 触覚語の原義 | 嗅覚への転義 |
|------------|----------------------|
| ʔɔɔn やわらかい | → ほのかな |
| sɛɛp 沁みる | → きつい |
| yen 涼しい | → 冷やかさを感じさせる |
| rɛɛŋ 強い | → きつい |
| bao 軽い | → 軽やかな、優しい、快く感じているさま |

2.3.4 触覚形容詞 → 音 / 声

触覚形容詞が聴覚を表す言葉と共に用いられる表現を [表9] に示す。

[表9]

| 共起語 | 各語の意味 | 用いられる意味 |
|-------------------|-----------------|----------------------------------|
| sǎŋ-khěŋ | 声・かたい | 相手を恐れず自信を持ってずばりと云ってのける声 |
| sǎŋ-kradāaŋ | 声・かたい | かたい口調 |
| sǎŋ-núm | 声・やわらかい | やわらかい声 |
| núm-hũu | やわらかい・耳 | 耳に心地よい声 |
| sǎŋ-ʔɔ̀ɔ̀n | 声・やわらかい | 穏やかな声, 自信がない声 |
| sǎŋ-ríap | 声・平らな | 落ち着いた声 |
| sǎŋ-khom-chát | 音・鋭い・はっきりする | 鮮明な音 |
| sǎŋ-sèep-khêo-hũu | 音・声・沁みる・鼓膜 | 大きくて高すぎる音 / 声 |
| sǎŋ-hêeŋ | 声・乾いている | 嘎れ声 |
| sǎŋ-ráo-rɔ̀ɔ̀n | 声・熱い | 情熱的な声 |
| yen-hũu | 涼しい・耳 | 耳に心地よく落ち着いた感じの |
| sǎŋ-yen | 音 / 声・涼しい / 冷たい | 冷たい音 / 声, 涼しさ / 冷ややかさを感じさせる音 / 声 |
| sǎŋ-nàk | 音 / 声・重い | 強調した音 / 声 |
| sǎŋ-bao | 音 / 声・軽い | 小さな音 / 声 |

[表9]で提示した通り, 触覚語は「sǎŋ 音/声」または「hũu 耳」を修飾して聴覚を表すようになる。そこに派生された聴覚の意味合いを [表10] にまとめる。

[表10]

| 触覚語の原義 | 聴覚への転義 |
|---------------|----------------------------|
| khěŋ かたい | → 自信を持った強い態度が示される |
| kradāaŋ かたい | → 優しさや滑らかさが欠けている |
| núm やわらかい | → 丁寧さや優しさが感じられる |
| ʔɔ̀ɔ̀n やわらかい | → 穏やかさや優しさが感じられる, 弱さが感じられる |
| ríap 平らな | → 落ち着きが感じられる |
| khom 鋭い | → 鮮明な |
| sèep 沁みる | → 音や声の刺激が耳にこたえる |
| hêeŋ 乾いている | → 元気が欠けている |
| rɔ̀ɔ̀n 熱い | → 情熱が感じられる |
| yen 涼しい / 冷たい | → 落ち着いて優しい, 冷淡さが感じられる |
| nàk 重い | → 強い力や影響力が感じられる |
| bao 軽い | → (音量が) 小さい |

3. 触覚を表す表現の比喩的転用における原義と転義

上記, 2.2と2.3の通り, 他の感覚分野から触覚を表すように転用される感覚語は「lúk 深い」, 「baaŋ 薄い」, そして「phêo 音が小さい」しか見られない。「lúk 深い」は精神的な痛みにおける「きつさ」, 「baaŋ 薄い」は触感に生じる「快さ」, そして「phêo 音が小さい」は触感に生じる「優しさ」という含意を持つ触覚表現を生み出す。触覚へ転用される他の分野の感覚語の少

なさとは対照的に、他の分野の感覚を表すように転用される触覚語は非常に多く存在し、また、触感、痛痒感、乾湿感、温感、そして圧覚、といった触覚の下位の分野の形容詞から転用されるものが見られる。触覚語から転用され、表現の多様性が生み出されるさまざまな分野の感覚表現には、原義には見られなかった含意が、転義においては生じることも多い。ここでは、それらの含意を、「望まれる・肯定的」なものと「望まれない・否定的」なものに大きく分ける。転用されるそれぞれの触覚語と転用先の感覚およびそこに派生するそれぞれの感覚表現における含意⁵⁾を〔表11〕にまとめる。

〔表11〕

| 触覚語 \ 転用先 | 視覚 | 味覚 | 嗅覚 | 聴覚 |
|---------------|----|-----|----|-----|
| khěŋ かたい | - | | | △ |
| kradāaŋ かたい | | - | | - |
| nīm やわらかい | | + | | |
| nūm やわらかい | + | + | | + |
| ʔɔɔn やわらかい | △ | △ - | + | + - |
| rīap 平らな | △ | | | + |
| khom 鋭い | + | | | + |
| thūu 鈍い | | - | | |
| cəp 痛い | △ | | | |
| səep 沁みる | △ | - | - | - |
| hēeŋ 乾いている | | | | - |
| rɔɔn 暑い / 熱い | | | | - |
| ʔūn 温かい | △ | | | |
| yen 涼しい / 冷たい | △ | | + | + - |
| rɛeŋ 強い | - | | - | |
| nāk 重い | - | - | | △ |
| bao 軽い | △ | + | + | △ |

〔備考〕：+ = 比較的望まれるまたは肯定的な転義を持つ。- = 比較的望まれないまたは否定的な転義を持つ。△ = 望まれる・望まれない、または肯定的・否定的の区別がない。空白 = 転用が見られない]

〔表11〕の通り、触覚語それぞれの原義と転用先に持つようになる転義の特徴を5つのタイプに分けることが出来る。

- 1) 原義には望まれないまたは否定的な含意があり、その転義にも主に望まれないまたは否定的な含意を持つようになる語。

このタイプは「kradāaŋ かたい」、 「thūu 鈍い」、 「səep 沁みる」の転用に見られる。これらの言葉の転義には望まれるまたは肯定的な含意を持つものは見られない。

- 2) 原義には快適またはプラス的な含意があり、転用された後にも同じような含意を持つよ

⁵⁾ ここでの「望まれる・肯定的」あるいは「望まれない・否定的」は、転用された後に用いられる意味を基準にして判断した。たとえば、「yen-hūu 涼しい・耳」→「耳に心地よく落ち着いた感じの(声/音)」は「望まれる・肯定的」、 「rót-thūu 味・鈍い」→「不調和で物足りない(味)」は「望まれない・否定的」、そして「sūi-ʔɔɔn 色・やわらかい」→「薄い色」には「望まれる・肯定的」も、「望まれない・否定的」のどちらの含意もない。

うになる語。

このタイプは、「sǎŋ-núm 耳に心地よい(声)」などのような転義を持つようになる「núm やわらかい」にしか見られない。

- 3) 原義には何ら特別な含意(望まれる・望まれない, または, プラス・マイナスの含意, 以降「特別な含意」)がないが, 転用されると特別な含意を持つようになる場合と, 転義にも原義同様特別な含意を持たない場合の両方がある触覚語。

このタイプは「ʔòŋ やわらかい」にしか見られない。「ʔòŋ やわらかい」は「sǎŋ-ʔòŋ(-ʔòŋ) 優しい光/明り」や「klin-ʔòŋ(-ʔòŋ) ほのかなにおい」のように, それぞれの転義に望まれる・肯定的な含意を持つようになる場合, そして, 「ʔòŋ-prǎo 酸味が足りない」のように, 望まれない・否定的な転義を持つようになる場合もあれば, 「sǐi-ʔòŋ 薄い色」や「rót-ʔòŋ 薄い味」となるように, 特別な含意を持たない転義になる場合もある。

- 4) 原義には何ら特別な含意がないにも拘らず, 転用されると, 転用先では主に望まれないまたは否定的な含意を持つようになる語。

このタイプは「khǎŋ かたい」, 「hǎŋ 乾いている」, 「róŋ 暑い/熱い」, 「rǎŋ 強い」, 「nàk 重い」などの転用に見られる。これらの触覚語の転義には望まれるまたは肯定的な含意を持つものは見られない。

- 5) 原義には何ら特別な含意がないが, 転用先では主に望まれるまたは肯定的な含意を持つようになる。

このタイプは「ním やわらかい」, 「ríap 平らな」, 「khom 鋭い」, 「yen 涼しい/冷たい」, 「bao 軽い」などの転用に見られる。これらの触覚語の転義には望まれないまたは否定的な含意を持つものは見られない。

<触覚→他の感覚>とその逆の<他の感覚→触覚>の転用によって生み出される意味的な特徴を[表12]にまとめる。

[表12]

| 転用方向 | 生理的感覚 | 内面的感覚 |
|-------|-----------------------------|-------------------------------------|
| 視覚→触覚 | × | 精神的な負担が感じられる痛感, 快さが感じられる触感 |
| 聴覚→触覚 | × | 優しさという心使いや嗜みの深さが感じられる触感 |
| 触覚→視覚 | 色の濃淡, 派手・地味 | 見て暖かさまたは冷ややかさが感じられる, 見て快さが感じられるかどうか |
| 触覚→味覚 | 味の濃淡, 特定の味の過不足, お腹にこたえるかどうか | なめらかさやまろやかさの食感の有無, また味に満足を感じるかどうか |
| 触覚→嗅覚 | においにおけるほのかさ・激しさ | 匂って快い感じ, 匂って優しさが伝わってくる感じ |
| 触覚→聴覚 | 音量・音調 | 聞き心地がよいかどうか, 情感を伴う声, 心が落ち着く声 |

4. 共感覚的比喩 (Synaesthetic metaphors) における方向性と意味的特徴

触覚の、「かたい」と「やわらかい」を表すのに、そのかたさややわらかさの具体的な触感の違いを表すために複数の語が存在するが、一方、「暑い」と「熱い」は両方とも「rócn」, そして「涼しい」と「冷たい」は両方とも「yen」という言葉で表現されているように、タイ人にとっては、温感よりもかたさややわらかさといった触感の方がより意識されると解釈することができるだろう。また、感覚語の原義には、望まれる・望まれない、またはプラス・マイナスの意味がないにも拘らず、転用されると、望まれるまたはプラス、あるいは望まれないまたはマイナスの転義を持つようになる語が多くあることが上記の資料から明らかである。基本的には、「かたい khěŋ, kradáaŋ」より「やわらかい ním, nôm」, 「鈍い thûu」より「鋭い khom」, 「暑い/熱い rócn」より「涼しい/冷たい yen」, そして「重い nàk」より「軽い bao」の方が比較的積極的な評価が付加されていることが分かる。「かたい khěŋ, kradáaŋ」より「やわらかい ním, nôm」, または「重い nàk」より「軽い bao」の方がプラスの評価がされやすいことはタイ以外の社会でも見られると思われるが、「暑い/熱い rócn」より「涼しい/冷たい yen」が望まれる状態であるという認識は年中暑い気候の中に住んでいることからくるものであろう。そのような付加された価値判断にはそれを用いる人々の生活環境やそれぞれの感覚に対する認識と意識が表されていることも、ここでは確認することが出来た。

転用される触覚語の中には、「?ócn やわらかい」, 「bao 軽い」, 「sèep 沁みる」のように、視覚、味覚、嗅覚、聴覚の全ての感覚に転用されるものもあれば、「thûu 鈍い」が味覚、「cèp 痛い」が視覚へしか転用されないように、ある特定の感覚分野にのみ転用されるものや、「ríap 平らな」や「khom 鋭い」のように複数の感覚分野へ転用されるものもある。転用状況を全体的に見ると、<触覚→視覚>と<触覚→聴覚>が一番多く現れ、その次は<触覚→味覚>であり、そして<触覚→嗅覚>が最も少ないことは[表11]で明らかになった。視覚には、明暗覚、色彩覚、形体覚、内外覚、遠近覚などのように多種多様な感覚が存在しているが、触覚から転用される視覚は明暗覚と色彩覚にしか見られない。ここで、転用先の感覚によって触覚からの比喩的転用に多少の差が生じる要因を考察するために、国広[1989]の論述を下記の通り引用したい。

「... 視覚と聴覚が他の感覚分野から借りるばかりであるということは、視覚・聴覚本来の形容詞が非常に貧弱であることを意味している。それはなぜであるか、ということになる。感覚そのものの発達の場合、鋭さから言うと、視覚と聴覚は他の感覚よりも圧倒的に高度に発達している。それなのに、なぜ言葉のほうがそれに応じる形で発達していないのか。その疑問を解決する手掛かりは我々の内臓感覚のあり方に求めることができる。我々は日ごろ胃腸などの内臓の存在を意識していない。... 視覚と聴覚も日ごろはそれが働いていることをまったく意識していない感覚である。... これに対して、他の接触感覚の場合は肌な

り舌の表面が何かを感じているというふうに感覚器官の働きがはっきり意識される。つまり視聴覚の場合に外界投射が行われるということは、感覚器官が働いていることを意識しないということである。働いていることが意識されないならば、その働き方を形容する言語表現が発達するわけがないことになる。かくして視聴覚本来の形容詞が未発達であることが理解されるが、実際はそれでは困るので、共感的比喩に頼ることになったものと考えられる」[国広1989:30-31]。

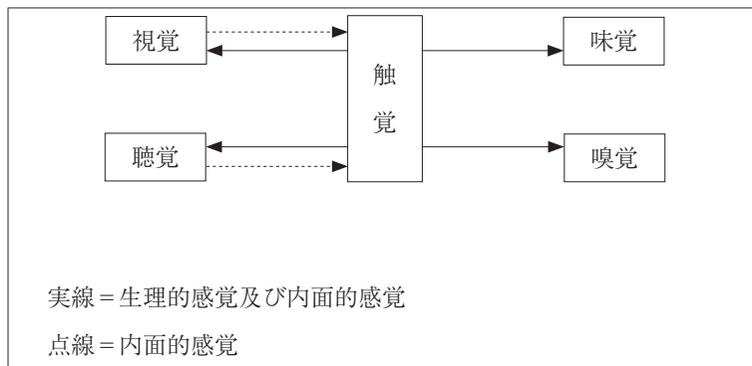
タイ語においても、国広[1989]の論述の通り、聴覚を表す基本語は非常に少ないため、多種多彩な聴覚を表すために共感的比喩に頼るようになる。宮本[2015]にも論証されているように、聴覚を表す表現には視覚語、触覚語そして味覚語からの比喩的転用が多く見られる。また、視覚語の場合は、視覚を表すタイ語の形容詞が豊富にあるということは宮本[2014]の論証でも明らかになったにも拘らず、明暗覚と色彩覚には共感的比喩に頼る表現が多くあることは、国広[1989]の指摘通り、明暗覚と色彩覚には本来それらの感覚を表す形容詞が発達していないからであると考えられるだろう。味覚の場合は、国広[1989]によると、舌の表面で感じていると感覚器官の働きがはっきり意識されるので、触覚と同じようにその働きを表す言葉が発達していると思われる。しかし、味覚語には触覚語からだけでなく、宮本[2014]と[2015]の論述で明らかのように、視覚語と嗅覚語からの転用も少なくない。これについては、西尾[1983]の論述を下記の通り引用したい。

「...現実にはわれわれが食物を評価するときには、狭義の味覚以外のさまざまな感覚を動員して総合的な判断をくだしているのである。視覚により食物の外観が、うまい、まずいに影響するので料理人は盛りつけにこだわる。嗅覚の大切なことは鼻をつまんでカレーライスを食べたら味気ないものであることからわかる。歯ざわり、舌ざわりなどの食物のテクスチャーに関する感覚やビールを飲んだときののどごしの感覚まで動員される。おなじ料理でも熱いか冷たいかという温度感覚によって味は分かる。...」[西尾1983:16]

西尾[1983]の記述のとおり、味わうということは、舌にある味蕾の感覚だけではなく、見た目、舌ざわり、においの感覚も動員されるので、豊かで、また微妙な味覚を表すのに、味覚語だけでは足りず、視覚語、触覚語、そして嗅覚語の比喩的転用の助けを必要としたと考えられる。一方、嗅覚の場合は、聴覚と同様に、触覚だけではなく、視覚と味覚からの比喩的転用が見られることは宮本[2015]の記述にもあった。しかし、その転用は聴覚と比べると多くはなかった。これは、従来、タイ人に意識される嗅覚には聴覚ほどの多様性がない為であると考えられるだろう。

感覚分野内での比喩的転用には、〈触覚⇔視覚〉、〈触覚⇔聴覚〉、〈触覚→味覚〉、〈触覚→嗅覚〉といった転用の方向が見られるように、必ずしも Williams[1976]などの従来の研究の指摘にあった一方向の転用ばかりであるとは限らない。触覚と視覚との間、そして触覚と聴覚との間には、双方向の転用が存在することが本稿で明らかになった。また、すべての転用は直接的に行われるということも明らかになった。この結果は、触覚語は一旦味覚に転用されてから嗅覚に転用するという Williams[1976]の指摘と異なったが、日本語においては触覚語から直接嗅覚への転用があるという山梨[1988]と国広[1989]の論述と共通する。何より、聴覚語は触覚を表すように比喩的な転用があると主張した宮本[2015]の指摘にあったことを確認することが出来たし、さらに、視覚語から触覚への比喩的転用が存在していることも論証することが出来た。また、視覚語と聴覚語は触覚を表すように転用されると、触覚にある本来の生理的感覚に、ある特定の内面的感覚を含意する表現になるが、何らかの生理的な触覚を表す表現として新たに生み出されることはない。一方、触覚語から他の感覚への比喩的転用が行われると、転用先のそれぞれの感覚の分野に、内面的な感覚を表す表現だけではなく、生理的な感覚を表す表現も新たに生み出されることが分かった。このように、感覚分野内での共感的比喩転用が行われる際、転用先のそれぞれの感覚分野に多種多様な感覚表現が派生されてくることだけでなく、転用元の感覚分野と転用先の感覚分野との間に行われる転用状況によって転用先の感覚分野の表現に生み出される意味的な特徴にはっきりとした相違があることも明らかになった。

触覚語と他の感覚語との間に行われる比喩的転用の方向及びそれらの転用によって生み出される意味的な特徴を提示すると[図1]となる。



[図1]

触覚語と他の感覚語との間の比喩的転用、及びそこに生まれた意味的特徴からは、[図1]からも分かるように、触覚を表す上で他感覚語からの比喩的転用にはほとんど頼ることなく、特

に生理的な皮膚感覚の表現には比喩的転用に全く頼っていないことが明かになった。それは、上記の国広[1989]の記述の通り、触覚は皮膚で反応していて感覚器官の働きがはっきり意識されるため、その働き方を表す触覚語の形容詞が他の感覚より発達しているというのがその要因にあると考えられる。

「síp pàak wâa mâi thào taa hěn, súp taa hěn mâi thào mưư khlam 十の口で言われたことは目で見たほど確かではなく、十の目で見たことは手で触ったほど確かではない」とタイの諺にもあるように、タイ人は耳や目から入ってくる情報よりも自身の肌を通して得る皮膚感覚により信をおき、確かなものと認識するというのもこの研究を通して確認することが出来た。

5. おわりに

本稿では、タイ語の触覚表現における比喩的転用の分析を通して、共感的比喩 (Synaesthetic metaphors) に関して、比喩的転用における方向性のみならず、比喩的転用によって派生した表現における意味的な特徴も明らかになった。しかし、分析のために取り上げた触覚語及びそれらの触覚語からなる共起語は、触覚語からの比喩的転用全体の中の一部でしかない。ここで得られた研究結果の確認をするためには、さらに多くの例をとり上げて検討することが望ましく、今後の課題でもある。

参考文献

- 楠見 孝, 2005, 「こころで味わう: 味覚表現を支える認知のしくみ」, 『味ことばの世界』, 海鳴社, 東京, pp.88-122.
- 国広 哲弥, 1989, 「五感を表す語彙—共感覚比喩的体系」, 『言語』 11月号, 東京: 大修館書店, pp.28-31.
- 貞光 宮城, 2005, 「共感覚表現の転用傾向について—嗅覚と聴覚/視覚を中心に」, 『認知言語学論考』 No.5, ひつじ書房, 東京, pp.49-78.
- 佐藤 博史, 2000, 「タイ語における感覚形容詞のメタファー的拡張」, 『天理大学学報』 第5巻 (第1号), 奈良: 天理大学学術研究会, pp.1-37.
- 進藤 三佳, 内元 清貴, 伊佐原 均, 2007, 「感覚領域からの意味拡張: 自然言語処理技術を用いたメタファーの分析」, 『メタファー研究の最前線』, ひつじ書房, 東京, pp.265-284.
- 瀬戸 賢一, 1995 (2011), 『メタファー思考: 意味と認識のしくみ』, 講談社現代新書, 東京. ————, 2003, 「五感で味わう」, 『ことばはあじを超える』, 海鳴社, 東京, pp.62-78.
- 谷口 一美, 『認知意味論の新展開』, 研究社, 東京.
- 富田 竹二郎, 1990, 『タイ日辞典』, 養徳社, 奈良.

- 中村 明 (編), 1995, 『感覚表現辞典』, 東京堂出版, 東京.
- 西尾 寅弥, 1983, 「食の感触を表す形容詞」, 『食のことば』, 柴田武, 石毛直道 (編), ドメス出版, 東京, pp.99-111.
- 宮本 マラシー, 2010, 「タイ語における色彩表現の意味的特徴」, 『大阪大学世界言語研究センター論集』 第2号, 大阪大学, 大阪, pp.35-64.
- , 2013 「味を表すタイ語表現における比喩」, 『言語文化研究』 第39号, 大阪大学大学院言語文化研究科, 大阪, pp.125-48.
- , 2014 「タイ語における視覚語の比喩転用」, 『言語文化研究』 第40号, 大阪大学大学院言語文化研究科, 大阪, pp.153-75.
- , 2015 「タイ語の嗅覚と聴覚を表す表現における比喩的転用」, 『EXORIENTE』 Vol.22, 大阪大学言語社会学会, 大阪, pp.37-60.
- 武藤 彩加, 2009, 「9つの言語における「共感覚的比喩」—「視覚を表す語」と「触覚を表す語」を中心に」, 『日本認知言語学会論文集』 第9巻, 日本認知言語学会, 東京, pp.181-191.
- 村田 忠男, 1989 「<触覚>さわることば—ウルマンのデータを中心に」, 『言語』 11月号, 東京: 大修館書店, pp.28-31.
- 山口 治彦, 2003, 「さらに五感で味わう」, 『ことばはあじを超える』, 海鳴社, 東京, pp.120-155.
- 山梨 正明, 2012, 『認知意味論研究』, 研究社, 東京.
- 山梨 正明, 2008, 「メタファーと認知のダイナミックス」, 『メタファー研究の最前線』, 楠見孝 (編), ひつじ書房, 東京, pp.3-29.
- 山梨 正明, 1988 『比喩と理解』, 東京大学出版会, 東京.
- G・レイコフ&M・ジョンソン, 1980 渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸 (訳) .1986 『レトリックと人生—Metaphors We Live By』, 大修館書店, 東京.
- Evans Nicholas and Wilkins David, 2000, 'In the Mind's Ear: The Semantic Extensions of Perception Verbs in Austrarian Languages', "*Language: Journal of the Linguistic Society of America*", 76:3, Linguistic Society of America, Baltimore, pp.546-593.
- Sweetser Eve E., 1990, "*From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*", Cambridge University Press.
- RATCHABANDITTAYASATHAAN, 2003, *Pojchanaanukrom Chabap Ratchabandittayasathan pho. sor.* 2542, Naanmee Publishing, Bangkok.
- WILLIAMS J.M., 1976 "Synaesthetic adjective: a possible law of semantic universals." *Language: Journal of the Linguistic Society of America*, 52:2, Linguistic Society of America, Baltimore, pp.461-77.